

# 皮膚疾患の水治療法

(特に浴法について)

盛岡市上田病院皮膚科長

野口 順一

## Hydrotherapy by Skin Diseases

(How to apply)

Jun-ichi NOGUCHI

Dermatological Dept. of Ueda Hospital

皮膚疾患においては、浴泉が直接皮膚の患部に接触するため、浴水の作用はその水質或いは泉質により大いに異なり、適応疾患は主としてそれらに左右されるのであるが、それらの各種の浴水や適応疾患に対応した浴法もまた重要な湯治要素である。

◎高温浴(43~46℃)：皮膚疾患治療に際しては、その痒感を鎮静させる機転がその最も必要な効能である。高温浴で皮疹の痒感を鎮静することができるが、個体は長時間の入浴に耐えられないので、短時間の頻回浴となる。即効的ではあるが、痒感は再燃するので2~3分間ずつ、1日に100回近く入浴したと云う例もある。

硫化水素泉や炭酸泉を適用すると比較的低温で鎮痒作用がある場合がある。

他に丑湯治と云って、夏の酷暑に耐えるようにすること、また発汗調整訓練などを目的とする浴法もある。

草津の時間湯に類する浴法は東北地方でも、鳴子、玉川、酸ヶ湯などにあり、これは顕症梅毒の皮疹の菌を焼いて追い出すと云う考え方で、マラリア発熱療法に類する浴法であった。

◎冷浴：寒ノ地獄が有名であるが、みそぎ、滝修行、海水浴などもこれに類する。

これも寒冷刺激で置換して痒感を抑制する手段であるが、同時に寒気に対する訓練と云う意味もある。

また熱傷直後や紅痛症に適用してそれらの激痛を緩和する。

寒ノ地獄では冷浴後、ストーブで身体をあたためるので、温冷交代浴と同質と考えてもよい。

◎微温浴、不感温浴：この場合は長時間浴となる。心疾患のある時も適用される。

東北地方では狂人の湯として定義温泉が有名である。

鎌先、下部、積翠寺などの湯治場では創傷や火傷の湯として適用されている。

また、微温浴は神経性皮膚炎など心因性の疾患に有効である。特に乳幼児のアトピー性皮膚炎様痒痒症に対して胎内還元を目的で適用される。

痒感を抑制する作用は高温浴や冷浴よりは劣るが、長時間に亘り皮疹を保護することができる

ので、創傷、熱傷、凍傷、天疱瘡や鞏皮症など、また褥瘡の治療および予防に利用される。また、痂皮や鱗屑を軟化溶解するので乾燥型湿疹、秕糠疹、座瘡性疾患などに良効がある。

微温長時間浴では、浴水が清潔でないと感染症を合併し易い。そのため大量の浴水で、しかも迅速な流水が望ましい。

欧州では、一般に比較的低温(36~40℃)で入浴するので、膿痂疹や真菌症などの感染症は適応外で、また禁忌とされている温泉も多い。

◎温冷交代浴、クナイブ療法：この浴法は皮膚血管の訓練が目的であり、それによって環境の変化に対する皮膚の対応を適切にする。紅皮症、蕁麻疹、多形滲出性紅斑や凍瘡などに有効な手段である。

例としては、各地の川原湯、特に老神温泉や俵山温泉が有名である。

◎蒸気浴：玉川温泉の箱蒸しは高温浴と同様の目的で行われる。

たで(蒸しタオル)……局所的な鎮痒清拭……頭顔の皮膚炎、昆虫刺螫、蛇咬傷、硬結、また眼病などに適用される。

酸ヶ湯マンジュウふかし、痔蒸し……陰部瘡痒症や痔疾に有効である。

◎圧注、滝ノ湯：頭部被髪部の鎮痒清拭……秕糠疹や脂漏性湿疹また頭部乾癬に対して施行される。

フランスのラ・ロシュ・ポセイでは強さの異なる各種の圧注が行われている。痒感の鎮静が目的であるが、高圧圧注と称して痂皮や鱗屑の除去や瘢痕の軟化も目的としている。

◎海水浴：海水は広い意味で等張の塩類泉と考えられる。日本では因幡の白兔の伝説があるが、医学的に取入れられたのは明治18年、大磯海岸で始められたのが最初である。

1750年に英国のリチャード・ラッセルがブライトンで始めた海水浴は、もともとは結核や喘息や腺病・滲出性体質などに対する療法であった。

西ドイツでは戦後より北海のヴェステルラントなどで海浜療法が盛んに行われるようになり、体質性神経性皮膚炎(アトピー性皮膚炎)に対して集団的に生活訓練的な療養が行われてきている。

ソビエトのソーチでも硫化水素泉浴と海水浴や日光浴との複合治療で湿疹や乾癬の療養をしている。

イスラエルの死海では、高張浴として、日光浴を併用して乾癬の治療を行っている。

◎泥浴、パッキング：東北地方では鬼首・荒湯で行われていた。硫黄泥を用い、特に疥癬や虱など寄生虫病に良効があった。

指宿の砂蒸しと異なり、泥の成分も問題となる。

欧州ではシュラムパートと称し、泥炭を用い、低温で痛痒を鎮静し、また尋常性乾癬に対しゲッケルマン療法の様式で、太陽燈照射と併用して治療が行われている。

◎袋洗い：伊香保などで行われていた局所の洗浄方法で、帯下或は腔感染症などに使われたようである。

◎直し湯：泉質の異なる温泉に変更することである。長期間、同一温泉で湯治をしていると、「慣れの現象」が起り、治癒が遷延する場合が多い。その状態に転機を与えるためである。慢性疾患、たとえば難治の創傷や潰瘍、また再発性癰腫症や慢性蕁麻疹などで行われる。梅毒でも以前には行われていた。

直し湯はまた、温泉反応や個体の体力低下などの都合で必要となる場合もある。

まず泉質の選定、次に浴法の指定が温泉療法医の勧告としては最も重要な事項であり、これらの関連を把握して、適切に指導が行われないと、皮膚疾患の湯治は順調に進展しない。